

松和泉守乘壽
松伊豆守信綱

吉川美濃守及
同 左馬助及
毛利右京及
益田越中及
國司備後及

二十七日今日節分公内寝ニテ節飯ヲ喫シ後正寝ニ出節酒ヲ嘗メ當直ノ諸臣へ杯酒ヲ賜フ

二十八日御目付兩人获着之時宍戸雅樂以下二十七人太刀馬代銀一枚ヲ贈リ謁見拜謝ス俗稱御案内

按本文ハ慶安承應御國目付記國備後益越中毛右京ヨリ觸狀ニ因ル慶安四年御目付之時記録ニハ宍戸雅樂以下八人ナリ何レカ是ナルヲ知ラス

同日公歳抄ヲ祝シ登城將軍へ謁見ス

同日大照公へ殉死五士ノ跡職ヲ命セラル

小川兵部少輔就克牧野玄蕃元昌二男三之允通克ヲシテ就克ノ遺跡ヲ繼カシメ祿四百石ヲ賜ヒ三ヶ年諸役ヲ免除ス筋目相續ノ出願ナシト雖モ大照公へ對シテトナリ

小川十郎左衛門克家系就克寛永八年十三歳ニテ秀就公御側被召出知行三百石被下置候正保二年(中)知行五百石被仰付候而御手廻頭梨羽相母後役被仰渡候(中)時秀就公御代御心入ヲ以段々有難被召仕候ニ付二世之御供可申上覺悟ニテ罷居候ニ付遺跡之願無之妻入ヲ等し不仕候然處慶安四年正月五日秀就公御逝去ニ付翌六日兵部宅ニ殉死之面々申請一同ニ二世之御供申上候云々

信常右京亮就實同姓太郎左衛門尉就正嫡子三十郎就朝ヲシテ就實ノ後ヲ繼カシメ祿四百石ヲ賜ヒ三ヶ年諸役ヲ免除ス理由前ニ同シ信常太郎兵衛初喜家系就實代知行高五百石トアリ

祖式主計就好弟權平義政へ跡職ヲ命シ扶持方切錢ヲ賜フ祖式次郎右衛門元家次男系祖計頭就好大照院様御代御側被召出段々御取立被成知行二百石被下置御側實弟川吉相勤云云實弟儀成成就跡職相續被仰付候處有子細知行二百石被下置御側實弟川吉爲春初兄就好之家ヲ繼ク後讓于養子祖式中左衛門持就政而後被於赤川半兵衛就實弟川吉是時傳吉爲春ヨリ出願ニ依リ御小姓扶持五人扶持就政御切錢三百三十日半兵衛之門成付云云

山名内膳正就行弟平四郎就忠へ跡職ヲ命シ就忠持掛ノ扶持方切錢へ就忠扶持方切
錢ヲ加テ之ヲ賜フ山名平四郎就忠充家系(前略)寛永十八年就忠十五歳ニテ兼テ元信育
恩十二人扶持銀八百六十石被下置之別而尋被召仕(中略)家筋由緒途ニ被召上勤御
之春同格ニ被召仕候面々一同ニ前髪御取セ知行高き増可被下之旨前年粗御物集
も有之候得共年内ヨリ秀就公御大切翌正月五日御逝去ニ付翌日小川兵部宅ニ相集
雖被申一同ニ其望無御座由ナ及挨拶候由ニ候(下略)山名平四郎就忠實ハ内膳就行弟
兄ニテ御座候就忠三歳ニテ父豊忠相果兄就行一同被召ニシテ寛永二十年秀就公御養育
ニ被召出並御小姓相勤申候御恩六人扶持銀四百六十石被下之山兄内膳一同ニ高
百八十九石ニ石直リ被
仰付家督被仰付(下略)

村上監物就正村上新左衛門充信四男金兵衛充信ヲシテ就正ノ後ヲ繼カシメ扶持方
切錢ヲ賜フ村上三郎左衛門正壽家系村上新左衛門元充五男就正秀就公
切錢ヲ賜フ御代御側被召出新賜祿知行高百六十石外二歩戻リ石有之

同日本年正月二十六日香取數馬就常井上主馬門前ヲ過ル主馬突然數馬ヲ斬ラント
シ闘争ニ及ヒ終ニ主馬ニ殺サル意趣ノ有無ニ關セス時分柄悪キトテ知行高四百石
沒收セラル井上主馬ハ先ツ手ヲ下シタルヲ以テ跡職ノ所分ニ及ハストナリ

同日本年四月二十七日吉田七郎左衛門就房天樹院參拜ノトキ山田八右衛門發狂シ
テ就房ト及傷ニ及ヒ兩人共死ス争闘ノ法規ヲ以テ兩家トモ知行沒收命セラル

吉田孫右衛門房經家系前略其後喧嘩ニテハ無之八右衛門亂心ニ決候趣被聞召上當
分ヨリ拾人扶持被下置候八右衛門家者斷絶被仰付候事

同日張宗徹知行ノコト末子庄藏ニ隱居セシニ孫八郎兵衛ヲ庄藏斬殺ス其實宗徹ノ
意旨悪キ故此舉ニ出タルニ依リ知行沒收セラル慶安四年分限帳張宗徹
三百二十石トアリ

同日田中六左衛門就房扶持方切錢ノ内孫久三郎正信ニ七人扶持ニ切錢三百五十日
ヲ賜リ甥飯田六郎兵衛就次三男山三郎正次ニ五人扶持ニ切錢三百五夕ヲ賜ラント
請フ就房綱廣公御幼少ヨリ奉仕辛勞シタルヲ以テ皆之ヲ允ス

田中治左衛門政房家系田中六左衛門尉就房條下飯田六郎兵衛就次二男山九郎就
信養子仕置綱廣公御側へ被召出右御加増分與仕別家御斷被遂御許容其後就信慶
安二十二月二十六日於江府病死仕ニ付就房方ニ分知返被遣候

田中六左衛門正信條下慶安四八月二十三日父六左衛門尉就房遺跡相續仕候八助

就信名跡之儀ハ弟山三郎へ立被遣之通就房ヨリ御断申上就房慶安四八月十四日

於江戸病死仕家續被仰出候節山三郎正次當時田中市兵衛正忠家一同ニ分知被遂御許容兩家

ニ相成候略下

同日兒玉半左衛門説吉ニ命シ其父伯耆就説ノ後ヲ繼キ知行高三百石ヲ領セシム

桂六左衛門就定ニ命シ其父二郎右衛門元貞ノ後ヲ繼キ采地五百石ヲ領セシム参考村上圖書元敬

村上掃部就武ヲシテ其父能登守元武ノ後ヲ繼キ采地ヲ領セシム参考元敬寶永六年

ヨリ延享三年迄三十八ヶ年組頭日野上總介元重跡職其子左近允就征ニ命シ高千石ヲ領セシム日野勘解由景征家

桂三郎右衛門就春跡職其子勘三郎信之ニ命シ知行貳百石ヲ領セシム

綿貫四兵衛就好跡職其子虎之助就景ニ命シ采地ヲ領セシム慶安四年分限額結貫成

渡邊六兵衛清跡職養子宇右衛門常ニ命シ采地ヲ領セシム参考渡邊六兵衛滿家系波邊源

櫻井忠左衛門就吉跡職其子清七就昌ニ命シ采地ヲ領セシム参考櫻井又次郎常吉家

就公御馬廻ニ被召仕知行二百石被下置候山ニテ長州阿武郡湊木村

桂五郎兵衛元保跡職其子半兵衛就信ニ命シ高五拾三石ヲ領セシム桂彦右衛門保房

信家督年號月日不相知

中村權兵衛就義跡職其子權三郎義治ニ命シ知行高六拾四石ヲ領セシム

江川九郎左衛門忠政跡職其子庄兵衛忠次ニ命シ高五拾石ヲ領セシム

三吉玄貞跡職其子長藏某ニ命シ采地ヲ領セシム参考三吉藤馬雅卿家系玄貞ノ後

ノ名見ヘス茂右衛門ハ玄貞ノ弟ナリ小知ヲ賜リタルニ早ク死ス弟養兵衛ヲ養子ト

ス養兵衛ハ玄貞次男ニテ茂右衛門某弟ナリ見茂右衛門病死ニ付養子ト爲リ繼家末

期ノ養子ニ依リ知行減弘中半右衛門尉就治ニ命シ其父與右衛門尉元下字ノ後ヲ繼キ采地ヲ受ケ公役ヲ奉

スル意リ無カラシム参考慶安四年分限額弘中

相杜左門エ扶持方五人ニ切錢三百六拾五匁宮部十兵衛エ五人扶持ニ切錢二百五拾

目石黒宇兵衛エ五人扶持ニ貳百五十日賜ルノ命アリ隱居及縁邊ノ出願ヲ許可セシ

モノ數十人

日未詳網廣公儲位ニアリシ以來諸臣ヨリ提出セシ神文數通アリ今一二ヲ抄録ス此

外御右筆中御陣侍御配膳衆御膳番御臺所方御膳夫下横目之御中間八人ノ神文アリ
略之御用所記録

私共事若き者と申第一御傍ニ被召仕候付萬事可相嗜之通内々被仰渡候彌如在仕
間敷候事

殿様御内證御作法善悪共ニ猥雜談仕間敷事付り御奥え被召仕候ものとも儀は
御上臈衆之上惣て御奥方之事致取沙汰間敷事衆道之知音一切仕間敷候於此儀は
假初之使等も仕ましく候其外頼母殿ふり之契約申替し仕間敷候事

付湯女傾城くるい一切仕まじき事

右小姓衆之分大幼共に如此之神文に仕上候事

御爲之儀に付存寄之儀萬事無用捨沙汰可仕事

御爲之儀に付親子兄弟たりと云共少も依怙最負無之様に可相嗜事

御家頼之諸人不限大小身に御訴訟申上候もの又は公事沙汰にても内證にて御
理様子に申上候は、承善悪共に内證にては不申聞各寄相場にては無用捨物筋

其沙汰可仕候自然内證にて承候時より不謂儀と存候は、人々より無用捨異見
可仕候事

右毛利右京益田越中國司備後兒玉民部神文壹通

毛利宮内枳杜兵庫兒玉淡路神文壹通

殿様朝暮の御作法惣て御内證儀猥に假初の儀雜談にも不申様に相嗜可申候事
御氣色に應し申候とて御爲不可然儀と存當候は、こなたより御す、め不申上
候様に是又心の及び相嗜自然傍輩間下々に至迄人々の上御尋候は、有體に可
申上候内證不申談方とてなき事を悪敷様に申間敷候尤最負の方とてなき事を
取合之様に申上間敷事

右枳杜兵庫兒玉三郎右衛門繁澤二郎兵衛出頭衆御小姓番頭御小姓衆大小御留
守御奏者其外御手廻りに居申もの御次番御陣侍迄

今度被仰付之御役目之趣奉存其旨少も緩仕間敷事

天下御法度并今度被仰出候御箇條相背者於有之は渥分見届可遂言上事

不依何事行規作法猥なる者於有之は承届次第先内證にて一旦其沙汰仕其身覺悟引替無別條於可相證儀に者其仕置に可申付候其上にても難指置儀に候は、可遂言上事

御一門衆御老中并御傍衆之儀たりと言共御爲に不成儀承届候は、少も無用捨可遂言上候尤親子兄弟之儀にても非分之沙汰仕間敷候事

三ヶ所御屋敷諸所之御番衆之儀は不及申御用方諸手子公用於調之儀も御爲に不成猥成様子承届聞留候は、可遂言上事

右御目付東條四郎兵衛財満五郎左衛門神文

今度被仰付候御役目之趣奉存其旨候財満五郎左衛門及東條四郎兵衛及被申付候所緩せ奉存間敷事

三ヶ所御屋敷諸所御番所并小屋々々にも今度被仰出候御簡條之趣相背者於有之は見届次第則五郎左衛門及四郎兵衛及迄急度可遂言上候縱御簡條之外之儀

たり共無作法之覺悟之者有之通承届候は、其沙汰可仕事

町向或見物所惣て御門外之儀別て心懸無作法なる儀見届次第御兩人え可遂言上事

御用方御臺所方諸手子之者私之仕番御座候て御公様之儀承届候は、可遂言上事親子兄弟たりとも於御法度之旨は最負偏頗仕間敷事

付り私之意趣有之候にても非分之のさた仕間敷事

右御歩行横目福原十兵衛高橋半右衛門渡邊彌右衛門原田太郎左衛門神文

毛利十一代史卷之三

大田報助編次

泰巖公記三

承應元年八月改元十壬辰正月元日公小寢ノ諸式ヲ畢ヘ正寢ニ臨ミ毛利萬吉以下四人列座雜煮餅ヲ賜フ在府ノ諸臣謁見杯酒及節飯ヲ賜フ又小寢ニ小座敷臨マレ粟屋縫殿以下左右列班制雁ノ式アリ

綱廣公御代始御規式帳

一御表雉ノ間ヘ被成出御雜煮之衆被召出銘々御太刀目錄ニテ御禮申上直様左右
ヘ被罷出候其御座配之次第如此

上	毛利 宮内	近
	田原	左
元日御雑煮	但此御座敷左 勝手ニ付如此	雑ノ間
<p>此御座敷へ古來ヨリ歷々被罷出候衆扣ニ數多雖有之 當分爰元ニ居相不被申候付此衆中計被召出候自今以 後座配之次第ハ先規ノコトクタルヘキ事 但當年ヨリ名代ハ御座配ニ不被召出候事</p>		

一右此御座配にて毛利萬吉毛利宮内兩人御盃被致頂戴いつものことく被召上候
其外平賀九郎兵衛益田主馬福原左近此三人へ御盃被遣銘々給置被申候事左候
て右之御座配衆御前退出被仕候事

一惣御對面初り申事御禮儀いつものことく御太刀折紙或は御禮錢にて其分限
く〜に隨ひ御禮申上候事古例のことし

一御奏者赤木仁左衛門高須三郎兵衛赤川七郎左衛門此三人役之但長はかま
一御太刀納は前髪無之小姓衆何も長袴にて役之

一握錢兼重九郎兵衛粟屋瀨兵衛渡邊勘右衛門此三人役之

一惣へ御盃被遣候分相澄候て柳之間敷居きわへ御銚子下り御手廻り之御小人御
中間へ汁椀にて御通り被遣候事

一元日晚御小座敷御座配之事

御表雉子の間へ被成出御御座配此書付のことく被召出候事

上	助 勘 右 衛 門	元 日 御 小 座 敷	此御座敷へ古來より數多被召出候 衆雖有之當分居合不被申候付此衆 中計如此至後年は座配之次第如先 規タルヘキ事 此御座配に當年より名代は不被召 出候事
	元 日 御 小 座 敷	此御座敷へ古來より數多被召出候 衆雖有之當分居合不被申候付此衆 中計如此至後年は座配之次第如先 規タルヘキ事 此御座配に當年より名代は不被召 出候事	
	元 日 御 小 座 敷	此御座敷へ古來より數多被召出候 衆雖有之當分居合不被申候付此衆 中計如此至後年は座配之次第如先 規タルヘキ事 此御座配に當年より名代は不被召 出候事	

一御小座敷右之御座配にて御引渡し出候て如先規御板出申候佐世與三左衛門熊

谷太郎右衛門兩人役之御板出候て鷹の庖丁永井九郎兵衛仕候則御太刀馬代銀
壹枚被遣候右御引渡之上にて御酒一返通り申候御盃粟屋縫殿頂戴仕それより
次第に下座へ御通り之様に給とをり候て御銚子とれ申候勿論御引渡もど
れ候て追つけ御膳出申候御酒三返にて相澄御湯も上り不申候て御膳とれ申候
御吉例不初こと

御目見之次第

- 一 御一門中 一 證人衆 一 老中 一 與頭出頭人をく番頭而番頭
- 南方宮内黒澤丹宮神谷勝左衛門同與一左衛門大和七兵衛福間彦右衛門同一
- 平赤川半左衛門
- 一 御小姓衆御守衆御伽衆醫師
- 一 御目付衆母衣御使番物頭
- 一 大與衆
- 一 右筆御膳番衆御忽籠奉行御茶堂御次番衆御膳夫衆御裏番衆諸手子之近習

一 御歩行衆地歩行陣付三十人衆

元日晚御書初に發句歌龍昌大夫人其他へ御直書等皆前例ノ如シ

二日今朝乘馬ノ式アリ歳男乃美織部掌殿河野權右衛門及屬吏ニ酒ヲ賜フ

今日公正髪ニ臨ミ諸初ノ式ヲ行シム陪席毛利萬吉以下十四人諸者春日八右衛門ナ

網廣公御代始御儀式帳

一二日之晚うたひそめ雉之間御座配之事次第前に書記ここく當分居相不被申衆
數多有之居合被申衆如此御座配にも於于時被召出候衆も有之

馬頭	土庫	田安房	陸田	殿	三郎	右衛門	時
一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人
馬頭	土庫	田安房	陸田	殿	三郎	右衛門	時
一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人
馬頭	土庫	田安房	陸田	殿	三郎	右衛門	時
一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人
馬頭	土庫	田安房	陸田	殿	三郎	右衛門	時
一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人

二二日之晩御蔭初之次第御表雉之間へ被成出御御座配右のごとくにて毛利萬吉
 毛利宮内益田主馬福原左近相杜兵庫頭此五人被召出御昆布粟出申候御板出申
 候佐世與三左衛門熊谷太郎右衛門役之廡之庖丁上村市左衛門に被仰付其上に
 ていつものごとく折紙被遣候銀子一枚左候て御膳出申候五三三路御酒三返御
 肴二つ御嘉例之羽ふしあへわかめの御吸物出申候先年者五返にて御座候へ共
 今年より三返に被仰付候三返過給之御吸物にすへ替左候て御嘉例之御盃三方

にて出着立土器物出申候桂勝左衛門志道權左衛門渡邊忠右衛門右三人役之左
 候て
 殿様被召上被成御加候時春日八右衛門高砂之小うたひ松こそめてたかりけれ
 と申所よりうたひ申候左候て毛利萬吉へ御手酌にて被遣御肴被遣候時御太刀
 高須三郎兵衛を以被遣候其次毛利宮内益田主馬福原左近相杜兵庫是まで御太
 刀被遣候殘御座配之衆御手酌被遣其外記録所兩人をく番頭兩人表番頭兩人龍
 昌院様よりの御使黒澤丹宮是までに被遣乃美絨部に御手酌被遣御前之分納り
 申候左候て毛利萬吉爲御名代御酌被仕御小姓衆御守衆御目付衆役人衆大番頭
 衆御右筆衆御臺所衆御陸衆陣僧迄被遣候但當番居相候者計被遣候事
 一御手酌初り候て御はやし三番

- 高砂 八右衛門 大 九郎左衛門 小 七郎兵衛 竹 權之介
 芭蕉 喜兵衛 大 熊之介 小 左兵衛 竹 權之介
 養老 八右衛門 大 九郎左衛門 小 七郎兵衛 竹 權之介

右此三番目に八右衛門立申候
以下略

今日翌三日大城御詣初ノ式ニヨリ木地ノ杯臺及酒代金百匹ヲ献セラル例ノ如シ
杯臺ハ松竹鶴龜ヲ著
色シ土器ニテ添フ

今日御目付齋藤左源太山田清太夫萩城ニ於テ之ヲ饗セラル慶安四年御目付之時
記録ニハ五日トアリ

三日公登城謁見拜賀太刀馬代黄金壹枚ヲ献シ又執政各家ニ至リ賀正例ノ如シ諸家

證人毛利萬吉益田主馬福原左近登城拜謁献物例ノ如シ路次證人奉行ヘモ至レリ

四日紀伊大納言水戸中納言尾張宰相紀伊宰相ニ抵リ賀正又松平越前同中務同兵部

ニ至リ賀正太刀馬代ヲ贈ラル其他列侯及旗下ノ各家ヘ回禮アリ略ス

五日公青松寺ヘ參拜樽一荷貳箱さうめん銀子一枚供セラル

六日千代姫君ヨリ龍昌大夫へ年首ヲ賀シ三種一荷ヲ贈ラル

十一日連歌ノ會及大般若經讀アリ又新初弓鐵砲始ノ式アリ連歌所大般若所大工始

弓鐵砲初ノ式場ヘ公出臨シテ其式ヲ行シム其順序ハ略ス

十四日公内寢ニ於テ具足祝ノ式ヲ行フ公祝餅ヲ喫セラレ毛利萬吉以下六名ヲ召シ
陪食又當直ノ諸臣ニ杯酒ヲ賜フ此祝日二十日ナレドモ大獻公思
日又御代替ニ依テ變更セラレ

按ニ歲末新年規式公在國ノトキ萩城ニ於テ施行スルモノト小異同アリト雖モ大
概ハ前記ノ如シ秀就公御代寛永比ノ規式ハ一層盛大ナルモノナリシカ今回御代
替ニ因リ改正ヲ加ヘ少シク省略ヲナシタルモノ、如シ

二十日氷上ヘ御名代派遣之時制禁老臣毛利右京益田越中國司備後ヨリ組頭役柳澤
監物以下七人ヘ當ル奉文アリ左ニ具ス

氷上御名代衆被參樣候事

一雖爲大身衆道具壹本之事

一供之若黨五人拾人之間分際次第此上ハ無用之事

一折箱辨當一切停止之事

一重箱提瓶之間貳組此外何にても可爲停止事

一寺方又者自然侍衆見物被參或町人にても見物衆より送物一切請引被仕間敷事

右付立之分に可被相調候從當年改如此候條此付立無相違様に寄組衆尤組中にて
も御名代役被仕候衆中手堅可被仰渡候御方より横目之者差出候條可有其御心得
候以上

慶安五正月二十日

國備後

益越中

毛右京

柳澤監物及清水五郎左衛門及

山田治部少及桂勘右衛門及

門田右衛右衛門及佐世雅樂及

益田隼人及堅田安房及

二十四日酒井紀伊守杉浦内藏允ヨリ諸家證人交替之事傳命アリ

福間帳前酒井紀伊守及杉浦内藏允及稻垣若狹及御三人にて被仰渡候吉川美濃守
及御證人お長棧をおまた棧に被成御替候毛利志摩守及證人萬吉を長棧及に被成

御替候益田越中及證人主馬及を山三郎左に被成御替候福原隠岐守及證人左近及
儀は内匠には不被成御替候左近及儀は彌被相詰筈に候左候て右の四人之證人は
如此中之定詰外に毛利佐渡守及毛利紀伊守及宍戸雅樂及三人の證人三番にして
一人宛被指出右四人に相成以上五人宛江戸相詰候様にご被仰渡候略下
二十九日將軍歳暮ヲ賀スルノ内書ヲ賜フ御代替初テノ御内書ナルヲ以テ公關老各
家ニ至リ拜謝ス

二月朔日御目付齋藤左源太山田清太夫ハ示ス家中分限帳及無給帳人員石高惣計左
ニ具ス

毛利和泉守外四拾四人江三三
月八家サ
勤チ始ト
スルモノ
、如シノ
者

拾一組之中一組兒玉三郎右衛門外拾七人

一組繁澤二郎兵衛外二十二

一組益田修理亮外二十四人

一組堅田安房守外八拾一人

一組益田華人外七拾八人
 一組佐世雅樂頭外八拾一人
 一組柳澤監物外六拾六人
 一組門田太郎右衛門外八拾八人
 一組桂勘右衛門外八拾三人
 一組山田式部少外八拾七人
 一組清水五郎左衛門外八拾八人
 三組之中一組船手浦孫兵衛外八人
 一組船手村上掃部外拾三人
 一組船手村上河内守外拾三人
 用方六拾人檢斷拾四人大工貳拾壹人平郡加子寺社人員合計八百八拾七人
 石高合計四拾五萬三千六百八拾四石
 扶持方切米遺者付立無給帳

扶持方切米取之侍三百五拾貳人同醫者外科六人茶道拾二人鷹匠七人膳夫拾九人陸
 之者百卅二人掃除坊主四拾二人諸細工人六十二人船頭卅壹人弓之者百四拾人鐵砲
 之者五百四人腕之者七拾六人中間千人煮方之者四拾七人加子貳百五拾人駕籠之者
 貳拾壹人人員合計貳千七百壹人扶持方切米知行高ニ直シ合計四萬九千五百六拾貳
 石壹斗

御目付兩人エ提出スル兩國石高左ノ如シ慶安五年
分限帳

付立

一高六拾五萬六千三百四拾八石 内檢之辻

内拾五萬三千百壹石九斗 藏入

五拾萬三千二百四拾六石壹斗

家中配但ふち方切米にて遺米知行高ニ直ス
共ニ

以上六月十七日

本書付紙ノ内

四十五萬三千六百八拾四石 地方
四萬九千五百六拾二石壹斗

無給ふち方切米ニテ遺米知行高ニ
直ス分

御上使へ差出候ニハ紙之分ハ書付不申候

三日國元ヨリ他國へ派出ノ使者へ手當成規六條江戸老臣毛利宮内少輔楢杜兵庫兒
玉淡路ヨリ奉文ヲ以テ國許老臣毛利右京益田越中國司備後へ報告ス其文左ノ如シ

御定之事

- 一 御國より遠國え之御使者衆には此中之使者催相可被遣事
- 一 御國より津和野濱田小倉廣島え被遣候御使者には御領内之間は往來之宿送無
送にして馬一匹近習通りより三百石持迄可被遣候もあひは被遣間鋪候事
- 一 御伽衆醫師衆御茶道衆役者衆繪書衆馬乘衆馬醫衆師衆御用方衆社家衆何も御
番手之外之衆於于時江戸被召上せ候衆御心付使者催相可被遣候若江戸に半年
も一年も御用にて被差留候は分限八拾石以下并無給衆には催相之外に召連候

人數上下御扶持方逗留中被遣候事

- 一 於江戸方々被遣候御使者衆之儀は定りたる御心付之外に天下御定之繼駄賃一
疋分往來并盡之はたこ錢其者之上下人數積りを以被遣候宿錢渡り錢御定之前
人別被遣候事

- 一 於江戸大組之衆他所え御使者に被遣候時は三度之旅籠銀繼駄賃一疋分渡り錢
御定之こしく被遣候事

付往來先様逗留之日數相究其間之御扶持方不被遣候事

- 一 江戸御番手其外御役目に付罷上候節御心付銀之儀此已後は三ヶ月分より上御
勘渡有間敷事

以上

右御使者其外御用に付他國え被遣候時之御心付從今年右之分に被相定候間此
辻を以可有御沙汰候以上

承應元に成

慶安五ノ

二月三日

毛	右	京	進	及	兒	淡	路
益	越	中	守	及	楯	兵	庫
國	備	後	守	及	毛	宮	内

此次ニ條書アリ左ノ如シ

江戸定々諸知行持御扶持方定

一百石ヨリ五百石迄百石ニ付五人扶持

但五百石ヨリ下ハ此當リニ増候とも近年被遣來候分ニ可有其沙汰候

一六百石ヨリ千石迄百石ニ付四人扶持

一千百石ヨリ二千石迄百石ニ付三人扶持

一二千百石ヨリ三千石迄百石ニ付二人半扶持

一三千百石ヨリ五千石迄百石ニ付二人扶持

一五千石ヨリ上之分限ハ百石ニ付一人扶持

右之當リヲ以承應貳ノ六月朔日ヨリ御勘渡候但此割符ニ壹人ニ不足半有之時ハ
 四步九朱迄ハ捨候て五步ヨリ上ハ一人ニ足シ被遣候知行半石之儀四十九石迄
 者下へ付ケ五拾石ヨリハ上へ付申候事

從公儀御心付限被遣御定

一百石ヨリ千五百石迄百石ニ付二人當リ

一千六百石ヨリ二千石迄百石ニ付一人八步當リ

一二千百石ヨリ三千石迄百石ニ付一人六步當リ

一三千百石ヨリ五千石迄百石ニ付一人四步當リ

一五千石ヨリ上之分限ハ百石ニ一人二步當リ

右之當リを以承應貳ノ六月朔日ヨリ御勘渡候但一人ハ不足之所又知行半石之

儀右ニ同シ

- 一 貳番定詰共ニ御心付銀上日別一匁八分下一人日別六分宛
- 一 三番催相上日別一匁五分下一人日別四分宛
- 一 使者催相上日別一匁三分七厘五毛下一人日別三分七厘五毛
- 一 馬催相一疋日別一匁二分五厘宛

右承應三ノ正月朔日ニ公定也

大組衆御番手之時御扶持方定

- 一 高五十五ヨリ百二十石迄上下三人分
- 一 同百三十石ヨリ四百石迄上分一人下百石ニ二人當リ
- 一 同四百十石ヨリ百石ニ下人二人當リ上分者不被遣候
- 一 同千百石ヨリ千五百石迄百石ニ一人八步當リ
- 一 同千六百石ヨリ二千石迄百石ニ一人六步當リ
- 一 同二千百石ヨリ三千石迄百石ニ一人四步當リ

一同三千百石ヨリ已上ハ百石ニ一人二步當リ

右承應三ノ正月朔日ヨリ御定也但此割符一人不足有之時ハ四步九朱迄ハ拾五步ヨリハ一人ニ足シ知行半石之儀ハ四十九石迄ハ下ヘ付ケ五拾石ヨリハ上ヘ付ケ申候事

右之御定御國并江戸矢倉方ヘも御證據物相渡候事

八日鹽引ノ鱒五尾ヲ將軍ヘ献セラル又關老各家ヘモ之ヲ贈ラル

十七日公上野東照宮ヘ初テ參拜太刀目錄銀二十枚ヲ献セラル

十八日公繼目ノ御祝トシテ龍昌大夫人ヘ御膳ヲ供セラル越後ノ君夫人姫君ミラ君モ來訪アリ在邸諸臣及諸手子三十人迄食ヲ賜フ足輕共ヘハ樽二一折宛諸組ヘ下付セラル

二十日岡忠右衛門長嶺市右衛門爭鬪及傷ニ及フ捕縛セラレ兩人共放逐ヲ命ヌ兩人ノ親岡六兵衛長嶺仁左衛門知行扶持方舊ノ如シ

二十八日毛利宮内相杜兵庫兒玉淡路ヘ命シ堅田安房守一組江戸番滿期下國ノトキ

路次法度九條ヲ發布セラル其文ニ曰

今度被指下衆路次御法度之事

一道中船中爲日用脇寄仕間敷事

付御理之上御暇被遣候衆ハ各別之事

一道中泊之儀各一宿ニ泊可申事

付與頭番頭は宿之跡先に罷居可申事

一朝罷出候時各一道に罷立與頭番頭跡先を可參事

一路次うち狼に無之様に可成ほとは一同に可罷通事

一道中并渡り馬繼に到迄喧嘩口論無之様に可相嗜之通下々迄手堅可申付事

一宿賃駄賃渡り錢其外公儀御掟之旨無相違様に下々迄堅可申付事

一大坂其外宿々にて自身之儀は不及沙汰下々迄狼に町ありき停止候事

付不叶儀候は其品與頭番頭へ相答用所可調事

一道中船中相船相宿之外酒飯之寄相停止候事

付雖爲相船相宿諸事之振舞仕間敷事

一舟泊り宿有之所にて下々に到迄陸へ上げ中間敷事但自然風波之時は可爲各別事

付不叶用所有之時は與頭番頭へ相理指免候上にて陸へ上ケ可申事

右之通可相守之旨被仰出候間手堅可被申渡候以上

二月二十八日

兒	淡	路
楢	兵	庫
毛	宮	内
堅	田	安
房	左	

三月十八日先是上野將軍家佛殿へ燈籠列候並ヲ以テ二ツ寄進ノ事聞老ヨリ傳達アリシカ奉行ヨリ通知ニヨリ今日之ヲ社殿ノ門外ニ建シム

二十五日毛利志摩元法卒年五十

二十六日諸家ノ替證人宍戸八助益田山三郎毛利長植昨日着府吉川美濃證人娘また

病癒起リ出發スル能ハス福間彦右衛門ヲシテ之ヲ證人奉行ニ報告セシム
二十七日參勤ノ證人共戸八助毛利長槌益田山三郎又賜暇ノ證人毛利萬吉益田主馬
福間彦右衛門誘導登城開老阿部豊後守召見八助長槌山三郎太刀目録小袖各二ヲ獻
ス萬吉主馬歸國ノ傳命アリ小袖二羽織各一ヲ賜フ開老并證人奉行ニ至リ拜謝ス
四月十日大猷公一周忌法會上野ニ於テ修セラハル公松平信濃同道參拜十三日十八日
亦同シ

同日御目付齋藤左源太山田清太夫今日萩出發國內巡回二十五日萩着

御目付待遇方順序慶安承應御國目付記ニ載ス少シク繁文ニ涉ルモ初度ナルヲ以
テ茲ニ抄録セリ

慶安四年御目付

齋藤左源太及利政

山田清太夫及重棟

右極月五日江戸御立十九日之夜大坂御乘船二十五日未刻三田尻御着りうか口迄

益田越中桂勘右衛門被差出翌二十六日萩之一日着ニ被爲成候此段江戸え御注進
毛利宮内及相杜兵庫及兒玉淡路迄大坂は岩脇又右衛門萩にて和智彈正林又兵
衛御附

正月五日御城御振舞正月十七日御城山御上リ輕き御茶屋被仰付夫にて御菓子御
酒此後六月二十六日天守ニも御上リ候様御挨拶

六月二十九日萩御立七月二日三田尻御出船

正月二十七日萩大廻リ御覽やな瀨南明寺花御見物辨當取合御料理參御廻ニ四
月十日萩より同日須佐御泊二十五日御歸萩

付立

安戸雅樂頭

毛利右近助

毛利紀伊守

毛利佐渡守

右之兼中ハ御太刀馬代ニテ御禮被申上候

御下へ佐々並へ被差出

毛利右京進
益田越中守
福原隠岐守
桂兵部少
國司備後守

佐世雅樂頭

同時山口 清水長左衛門

毛利右京

萩 益田越中

國司備後

味岡半左衛門

左源太及家老

三上彦左衛門
會津兵右衛門
日向仁左衛門
安井源左衛門
大谷治兵衛
山本三左衛門
柴田市郎左衛門

清太夫及家老

御着之日ニ

一始而之儀ニ付三ノ繕茶數をも取繕候様にこの事に候得共達て御断にて二汁五菜
外剛物也

外料 徳 隣

繪背 三谷清兵衛

御水風呂を持せ 梅 林

馬醫 村井七兵衛
御右筆 澄澤四郎兵衛

右三田尻より萩迄御供村井澄澤は御跡をしたひ歸り候

申定覺

一家中への振舞之儀汁二つ菜は剛物共に五色酒は三返木具盃之輩は可爲無用事
一家中より菓子茶之子肴の音信半年の逗留中に二度程は可申請右之外御返し可
申事

一萬道具之儀は少の物も返進可申候此方にて事を欠申候は、斷申可申請候事
一御馳走之啓之儀は何にて千代熊及御啓より請取一月切に手形を出し啓衆え、
勘定を遂可申候事

一所にて賣買其所之直段次第に買調可申候間高くも安くもなく候様に相場之通
に御上使衆内之者に商人よりかい仕候様被申付尤候事

一逗留中下々縫物せんたく物之宿を定直段究誂申候様に被申付可給事

一町在々にて少々賣買物とも右より代を請取賣渡シかい還不仕様御斷可給事
一兩人御上使内々は御えん慮なく悪キ事御座候は、則有躰に可有御内證候事
以上

慶安四年暮上使

上ノ關へ御迎

福原隱岐守
山田治部少

三田尻へ
御留守居壹人
當職壹人

山口へ
毛利佐渡守
清水五郎左衛門

佐々並へ
佐世雅樂頭
門田太郎右衛門

大屋へ
毛利右近

毛利紀伊守

桂勘右衛門

町ノ入口からひ札場

益田隼人

町奉行

馬乘馬場大平ノ御門へ

御留守居壹人
當職壹人

御宿當分御待請

柳澤監物
飯尾肥後守
粟屋勘兵衛

監物は兩御宿肥後勘兵衛は一人宛御宿へわかり候て一兩日過候て行可申候

定付
林又兵衛
和智彈正

○御城御振廻正月二日

○御暇乞之御振廻御城にて六月二十六日天守へも御上り

○御立之節佐々並へ門田太郎右衛門兵衛能登山口へ熊谷主計兵衛式部三田尻へ越中柳澤監物彈正又兵衛階者衆今度は御供不及御舟手與頭御供達て御無用之由にて不被差出候

○御逗留中月々御國肴一種宛御音信

貳千三百石 左 源 太及
千石 清 太 夫及

江戸御立十二月五日なり同二十六日御着二十七日美濃様へ御兩所御出被成各被召出御老中様より之御奉書御渡御口上にても御國御仕置緩不仕候様にと被仰渡美濃様奉存其旨候通御請被仰上御奉書御請は江戸にて殿様御直に酒井讃岐様松平伊豆様阿部豊後様松平和泉様へ被成御出家來年寄共迄御奉書難有奉存之由御禮

一 御目附衆へ知行物成被進候儀指而公儀より員數旁御差圖にては無之候諸國共に其國之物成辻を以月數之多少吟味候て被進來右之分之由候

一 單米拂にして直段は秋より當六月迄之間御國中高直段にして銀子にて相渡大坂にて御渡シも同斷目錄御調させ國中物成惣並五ッ成其中半分何百何十石銀にして何貫何百目但和市何程之沙汰と具書付彈正又兵衛を以御兩所之御内衆へ

一 高貳千三百石

此物成千五百五十石五ッ成にして

惣物成四ッ成にして其半分 四百六拾石

五ッと四ッ成之違之石辻 百拾五石

一千石

此物成五百石五ッ成にして

此半分貳百五拾石 貳百石

五ッ成と四成之違石 五拾石

一 左源太丞御定紋 横もつかう

但けんなし

人數五十人ほど

内

七八人ほど手廻侍小姓

十人ほどかち侍

三十七人ほど中間小者

一 清太夫を御定紋 みつともゑ

人數四十五人

内

二十人ほど侍小姓かち侍共

二十四人ほど中間小者

大記録卷七齋藤左源太山田清太夫江戸ヨリ派遣半年在萩ニツキ銘々分限高ノ御合
力米兩年分金銀ニシテ附與セラレ兩人ヨリ收領書アリ此員數ト相違セリ
十五日客冬板本遠江ヲ以テ發布セラレタル諸臣御役目除條數之中御舟手ト陸トノ
御役目除先年ヨリ差異アリ今回江戸在勤其外陸ノ御役目除規定セラレタルヲ以テ
本年三月二十六日御舟手衆御役目定メノ如ク執行スヘキヲ江戸老臣ヨリ國許老臣
へ傳達ス其文左ニ具ス

一御家中衆御役目除方之儀御國え申遣候書狀之内書拔

一江戸へ御役目に被遣候衆は休息六十日事

一京大坂へ被遣候衆は休息二十日之事

一長崎其外隣國へ被遣候衆は休息十五日之事

一他國御役目に被遣前廉之儀は被仰掛候日より御除之事

付江戸御番手之衆は六ヶ月前より可被指除候但先年大與六番手に被仰付
候節御除之月數に被引合相違候はと一通り可被仰越候

一御國中にて於于時之御役目には御普請役被指除間敷候由前廉申遣候へとも
御國中とても萩外之御役目造作も入人をも召連候間被仰懸候日より罷歸候
迄は除可被遣事

四月十五日

毛	右	京	及	兒	淡	路
益	越	中	及	梶	兵	庫
國	備	後	及	毛	宮	内

- 一御船手衆御役目之定
- 一四歩半之役加子如先規可被申付事
- 一上之關兩人御役目之儀者持懸不殘先規之分に可被指除事

一 牧野五兵衛御役目半役可被指除事

一 三田尻御用方に付居候衆之儀は高五拾石宛御役目被指除殘石辻御役目可被申付事

一 四歩半之役加子被指出候内に自身御役目に被遣候時は他國之儀は不及申御國內何レへ成共自身被遣候は、其口數如先例御役目可被指除事

一 與頭衆御役目之儀高五百石宛可被指除事

右御船手御役目之儀陸之御役目御簡條に引合先如此候條此辻を以御役目之差引可被申付候此段江戸へ相伺候條若江戸より様子替に被仰下候は其節可申入候條可有其御心得候以上

慶五ノ

三月二十六日

國 備 後
益 越 中
毛 右 京

村 上 掃 部 及
村 上 河 内 及
浦 孫 兵 衛 及

右去冬板本遠江を以被仰出候御家中御役目之御簡條之内御船手と陸との御役目先年より様子違申に付右之分に被仰渡候由尤に存候彌右之辻に所勤被仕候様に御舟手與頭中へ可被仰渡候以上

卯月十五日

兒 淡 路
楢 兵 庫
毛 宮 内

毛 右 京 及
益 越 中 及
國 備 後 及

二十一日上野法會ニ就キ公ヨリ香典銀三拾枚龍昌大夫人ヨリ銀拾枚使者ヲ以テ納メラル

二十二日上野法會滿散ヲ祝シ公登城

二十三日去ル二十一日吉川美濃守證人於また着府福間彦右衛門ヲシテ之ヲ證人奉

行ヘ報告セシム

二十四日於またヨリ證人奉行ヘ拾三宛使者ヲ以テ贈ラル

二十七日毛利日向守歸國暇ヲ賜ヒ銀三百枚拾十ヲ賜フ寛明日記徳山諸四月十三日トアリ

二十八日證人於またヨリ縞珍三卷大城ヘ献ス證人お長歸暇ノ傳命アリ拾ニヲ賜ハ

五月二日將軍ヘ端午ノ帷子十五内單物龍昌大夫人ヨリ帷子三内單物献セラル

五日公登城將軍ヘ謁見

二十一日公ヨリ上野東照宮ヘ寄進ノ燈籠今日之ヲ社前ニ建シム

二十二日毛利和泉守歸國暇ヲ賜ヒ帷子三十ヲ賜フ

二十六日堅田安房初テ聞老ヘ謁シ太刀馬代ヲ呈ス今ヨリ老臣ニ加ルヲ報告セラル

二十九日聞老松平和泉守邸ヲ訪ヒ老臣ヨリ提出ノ連判誓紙ニ血判ス

二十八日堅田安房ニ歸國ヲ命シ江戸老臣ヨリ國元老臣ヘ奉文ヲ以テ御役目御除及御用人御心付之覺書少臣ノモノ隠居養子取扱方ヲ傳達ス其文左ノ如シ

御役目御除之付立

一御留守居三人

右ハ加判役ニ付非番之年御國役ハ千石之御除天下御役目之時者持カ、り半

役に可被仰付候出銀之儀は江戸を三番に被仰付候間可被差除事

一證人役

右は高八百石分天下御役御國役共に出銀御普請役可被差除事

付番手に被仕候證人衆は當り前の年計右之石辻可被指除事

一當職役

右は千石分御普請役出銀共に被除候事

一八與之組頭衆

右は五百石分御普請出銀共に可被指除事

付益田修理御役目右同前之事

一 寺社奉行三百石分之御普請役出銀共に可被指除事

一 郡奉行

右は御普請出銀共に半役御除但郡廻り候間は御普請役一圓に可被差除事

一 御藏本兩人

一 町奉行

一 御普請奉行

右は御普請役出銀共に半役可被指除事

一 三田尻山口山代之代官

右は御普請役出銀共に被除候事

一 御所務代

一 給領所務代

一 浦究

一 御藏本役

一 御留守居衆之手子

一 御武具方

一 與代役

一 繪圖方

一 御馬のり

右は高五十石宛御普請役出銀共に御除組分限五十石以下は持かゝり可被指除事

一 繪師

一 醫師

右は持かゝり半役御普請役出銀共に可被指除事

一本村權兵衛 入江仁左衛門

右兩人持かゝり不殘御普請役出銀共に可被指除事

一役者衆

右持かゝり半分御普請役御除出銀之儀は不殘可被仰懸事

一於于時被仰付御役目萩内にて調候御役目は御除無之事但在々或は上使御上下
なとに上關三田尻邊其外へ被指出候時は萩罷立候日より罷戻候日迄持かゝり

御普請役可被指除事

一於于時江戸御用に被召寄候衆前六十日後六十日引合百二十日休息可被仰付候
急に被仰渡前六十日休息不相成時者罷下候上差引仕前後百二十日之休息可被

仰付候事

付江戸御番手之儀は前六ヶ月後六十日休息可被仰付事

付於于時江戸被召寄衆一番手ほとも相詰候は其御役目により至其節除奉書

差下可申事

付京大坂長崎へ御使に被遣候衆之儀は前後四十日休息可被仰付事

此外隣國御使之儀は前後二十日休息可被仰付事

一類火に逢候者は貳ヶ年之御普請役可被指除候火元之儀者被指除間敷事
以上

右御用人御役目除被遣候今度改如此被仰出候條此辻を以可有御沙汰候以上

慶安五

五月二十八日

兒 淡 路

相 兵 庫

毛 宮 内

毛 右 京 及

益 越 中 及

堅 安 房 及

一板本遠江守御役被仰付に付出銀御普請役共に高五百石分被指除事

一南方木工允今年より三ヶ年諸役相除候事

承應元十二月六日に

當分御役目御除之衆

一安戸雅樂頭御役目當年より三ヶ年之間御免候事

一梨羽六 小川三之允 信常三十郎 山名平四郎 祖式權平 村上金兵衛

久保虎之介

右七人今來年之間諸役御免之事

以上

右當分諸役被指除候衆如此候條以此辻可有御沙汰候以上

慶安五

五月二十八日

兒 淡 路
楯 兵 庫
毛 宮 内

毛 右 京 左

益 越 中 左

堅 安 房 守 左

御用人御心付之覺

一郡奉行御心付之儀在郷廻り候時は萩を罷立候當日より歸着の日迄十人扶持方可被遣候并逗留中薪日別一荷宛村道之傳馬二疋地下役に可被申付事

一御所務代衆御心付之儀才判所逗留中五人扶持可被遣候并薪二日に一荷宛往來之傳馬一疋地下役に可被申付候其外紙墨筆此中御定之分に可被遣候併被相究指引可被仕候事

但萩廻御所務代は才判所逗留難極候條正月より十二月迄月々三人扶持可被遣候薪は被遣間敷候村道傳馬在郷廻り候時は一疋宛地下役に可被申付候又濱崎御用人は正月より十二月迄二人扶持可被遣候薪は被遣間敷候事

一御所務代手子并在郷御用に被指出候少身衆無給衆御心付之儀萩罷出候日より

歸着當日迄二人扶持可被遣候并村道之傳馬一疋地下役に可被申付候事

一御步行衆在々御役目日數久敷逗留之時は二人扶持可被遣候三十日より内に仕舞候御役目に候は、一人扶持可被遣候村道之傳馬二人間へ一疋宛可被遣事

付萩内にての御役目之時は増扶持被遣間敷事

一三十人衆在々御役目日數久敷逗留仕御役目に候は、二人扶持可被遣候三十日より内に仕舞候御役目に候は、一人扶持可被遣候又村道之傳馬二人間へ一疋宛可被遣事

付萩内御役目之時は一人扶持可被遣事

一御弓鐵砲衆御役目萩在々共に日別五合宛可被遣候御普請役又は田頭などへ罷出候御役目に候は、日別七合五勺宛可被遣事

付御弓衆在々へ被遣候時一人二人三人にても村道之人夫一人可被遣候御鐵砲衆へは被遣間敷事

一八十石より四十石迄之大組之衆時々御やごひにて在々之宛或は御普請等に被

付置日數逗留有之は右之内大少共に三人扶持村道之傳馬一疋薪二日に一荷宛可被遣候三十日より内に仕舞候御役目に候は、御扶持方に及間敷候事

付仁指にて無之役目廻りを以組より被指出御役目に候は、御扶持方被遣間敷事

一給領所務代之儀此中之分に可被付置候御心付之儀最前も御家中借銀有之衆より出來を以被遣候由候間其分に可被遣候其外紙墨筆手子村道之傳馬此中之分に可被申付事

一浦究之儀大組之少身衆高六十石より内之衆しかと在宅仕候様に被付置手子に御中間一人可被付置候増扶持入木等は不被遣候事

一吉田花岡御茶屋番大組之少身衆六十石より内之衆一人宛しかと在宅仕候様に可付置候増ふち入木等は不被遣事

一山代諸口屋并都濃郡杉之峠徳地ひよ谷口之口屋番富田竹木御米倉之番此中地下人被付置候今年よりは此中間一人宛可被遣事

一 賀野口屋岩崎惣左衛門此中調來候今年よりは小身通の者一人可被付置候事
 一 山代紙見取之者七人御心付之儀此已後は二人扶持計可被遣事
 一 杉山銀山に矢田部甚左衛門此中之分に被付置御心付米月別四斗宛暮に銀子二枚可被遣事
 一 萩山口紺屋灰究之儀萩は御藏本番頭山口は御茶屋より相究切手を出候此中之分に沙汰可被申付事
 一 少身衆無給衆地方御歩行衆御陣借衆三十人衆之都合御藏本兩人に可被申付事
 一 御普請方竹木御仕置萬知手一人被相定時分〳〵に彼者相計其沙汰申出内々仕置仕御用次第御木屋方へも其者より時々相渡又江戸御用之御材木之時は積廻し沙汰等迄可被申付事
 一 三田尻都合人に御心付米五十俵宛可被遣候薪一ヶ月に廿荷并一馬の草わらすくも地下役に可被申付事
 一 山口都合人に米三十俵宛可被遣候薪一ヶ月に拾五荷并馬之草わらすへて地下

役に可被申付候事

一 御目付衆二百四十石持に馬之喰大豆日別二升計百六十石持に馬之喰二升之外に口付二人之者扶持方可被遣候此外わら草すくも等之入目不被遣候事
 一 萩町奉行右御目付衆同前之御沙汰候事
 一 大組馬之喰二百石持に日別一升五合百六十石持に日別二升宛可被遣候二百石以上之衆は公儀より喰は不被遣候自分に馬所持可有之候事
 以上

右御用人御心付之員數并諸役者等新儀之御沙汰諸事改被仰付候間此辻を以可被申付候以上

五月二十八日

兒 淡 路
 楯 兵 庫
 毛 宮 内

堅田安房守迄

一御國へ奉書扣

少身之知行持衆無給衆御徒衆三十人衆其外何も少身通り之衆隠居或は養子
又は跡目などの儀近年は萩老中衆校了を以被申付たる由候此以後之儀は雖
爲少身名字有之程之者之儀は爰元被相伺候て御意次第被致御沙汰候様にと
被仰出候條可被得其意候恐々謹言

慶五也

五月二十八日

兒 淡 路
楢 兵 庫
毛 宮 内

堅 田 安 房 守 及

同日三浦七兵衛正次先代以來多年勤績勞苦ニ對シ知行四十石下賜シ公役ヲ怠ル無
ラシム三浦小四郎家系四十石加増本
知引加高二百九十石トアリ 井上六兵衛元宜右同前知行五十石加賜シ勤
仕ニ怠無シム市川九郎右衛門就貞右同前知行五十石加賜ス平川半兵衛就勝右同前

知行三拾石下賜シ勤役怠無ラシム

同日村上監物就正跡職金兵衛充信へ知行高百二十石四斗ヲ賜リシカ秀就公殉死ノ
後ナルヲ以テ特ニ百六十石ヲ下賜セラル村上三郎右衛門正壽家系
知行高百六十五石トアリ 祖式主計就好跡
職權平義成前ニ同シ福井三左衛門就晴父助左衛門就卯病擲ニ在リ就時代役中死亡
セシヲ以テ跡職ハ就卯ニ命シ勤仕ヲ怠ル無カラシム松浦丹宮就采地ヲ其子百介恒
ニ讓與セント請フ丹宮新仕ノモノナルヲ以テ跡職繼續セシムヘカラス然レ共百介
ハ實子且幼穉ナレハ扶持方五人切錢二百五十目ヲ賜リ領地ハ返上セシム野村作兵
衛元次跡職ヲ其子勘兵衛就房ニ命シ采地ヲ領セシム吉田長右衛門某死後跡職ヲ粟
屋肥後守次男又ハ兒玉勘左衛門ニ繼續セント請フ嗣子ナキヲ以テ家筋斷絶本家吉
田中左
衛門忠之
家ナリ
毛利右近就信ニ命シ其父志摩守元法ノ後ヲ承ケ采地變萬三千ヲ領シ公役ヲ奉セシ
ム國重忠助實井上源左衛門就政男九郎左衛門就久生前弟某ヲ養子ト爲サント請
依爲甥子分ニシテ秀就公近習ニ被召出フ公聞ニ達セサルヲ以テ跡職ヲ命ゼズ小島玄齋中村八左衛門細野傳兵衛竹山三郎

右衛門數年大照公ニ勤仕ス財政困難ノ際ニツキ知行沒收シ扶持方下付セラル細野傳兵衛ハ暇ヲ賜フ按ニ四人ハ臨時必要アリ中村隣益五人扶持切錢二百五十目ヲ賜リ新規召出サル萬變書ニ計立中村隣益事御國ニ即扶持人計赤川十郎左衛門就政秩祿父筑後守元恒多大ノ借金ニ對シ先年祿千石ヲ指出シ大概返還シ其後本知四百石返付セラレ殘六百石ノ返付ヲ請願スト雖モ許可ヲ與ヘラレス然レトモ止ヲ得サルノ願意ナルヲ以テ知行百八十石ヲ返シ本知引合セ五百石ト爲シ養子勘解由就直ニ賜リタル扶持ハ返上ヲ命セラル新山肥前守元村知行四百石之内二百四十石ヲ長男勘左衛門就信ニ讓與シ百六十石ヲ二男五郎左衛門就村ヘ分與セント請ヒヲ允シ勤仕怠ル無カラシム

坪井與三右衛門政和生前ニ持掛リ扶持方二人分切米六石ト嗣子神兵衛政光扶持方四人切錢二百七十目ト加ヘ政光ニ賜ラント請フ父子ノ給料ヲ併セテ賜ハルコトハ許可成リ難ク然レトモ梨羽頼母ニ付屬シ數年勤仕セシモノナレハ特別ノ恩惠ヲ以テ父子ノ給料ヲ合セ此内ニテ三人扶持ニ五石政光嗣子ニ賜リ地方御步行トナシ殘

ル五人扶持切米十石ニシテ政光ニ賜ハルノ命アリ

晦日將軍端午ヲ賀スルノ内書ヲ賜フ使者福間彦右衛門ニ帷子ヲ賜フ

六月二日江戸ヨリ奉書ヲ以テ堅田安房後任熊谷主計頭元實ニ大組頭役ヲ命ス

同日江戸ヨリ奉書ヲ以テ板本遠江守就時ニ大目付ヲ命ス

三日毛利宮内ニ歸國ヲ命ス依毛利右京參府也

同日江戸ヨリ奉書ヲ以テ國司備後就正因老極當職ヲ免シ御國加判役ヲ命ス

五日公堅田安房ニ墨印ノ令條ヲ賜ヒ國中仕置ヲ命シ政務ヲ董督セシム又江戸老臣ヨリ奉文ヲ以テ家中他國役之時船手當ヲ傳達ス其文左ノ如シ

申聞條々

一今度國中仕置之儀申付候萬無用捨可申付候自然不及分別儀有之時者留守居之者年寄共可令相談事

一天下御法度之旨至在々迄手堅可申付候并御物送其外御用之儀津々浦々無緩様に内々可申付事

付きりしたん究之儀不忘穿鑿可仕事

一諸在郷之儀郡奉行兩人并代官作等時分ノ心遣無油断念を入申付所專一に候兼又地下百姓等へ無牀之儀不申懸様に手堅可申聞事

付郡奉行在々之見及代官共申付品之善悪依帖無之様に可申付候并公事等非分之沙汰太令不謂儀候能々可僉議背事

一代官共諸事私欲之覺悟并地下持あらし不申様に内々せんさく可仕候若背此旨者於有之は即時可遂言上候少之儀と存令延慮わきより聞届候は其身可爲越度候右之旨趣を守在々能於有令守護者は是又可致言上候依其品或は時之褒美或は立身等も可申付事

付諸役人可爲同前事

付代官諸役人共にさしむき大なる誤於有之は不及言上各相談之上則科に行

ひ追て其首尾可言上事

一萩藏本諸事之沙汰に候條兩人之心得肝要に候事

右以此辻可致沙汰者也

六月五日

御 黒 印

堅田安房守とのへ

御家中衆他國御役目之時舟被遣御定事

一知行持百石ヨリ下并無給衆其下々は不及申上下之舟可被遣事

一一百石以上并無給之衆も高百石之上に當り候衆には舟不被遣候事

一大少身共に御急用之御使者又は舟着之城元へ御使者に被遣候時者先舟加子どもに被仰付運賃調可被申付候事

付運賃之儀百石舟一艘三田尻ヨリ大坂迄米三石六斗に被相定事但格數増候

時は右之勘合ニテ運賃増可申事

一常々之御使者勿論御番手之上下大少身共に公儀之御舟かさせられ候事停止に可被仰付事

付大坂御用に付上り合候舟之儀は別條無御用下り申時は運賃之沙汰にて加

り申度と申者には貸可被遣候自然其儀に付御舟大坂に指留逗留候は、其
間之加子飯米加り年より調可被申付事

一上使事に付大少身共に被召仕候時舟被仰付或は御貸被成候御沙汰於于時可有
校了事

右之分に被相定候條以此辻可有御沙汰候以上

辰ノ
六月五日
兒 淡 路 守
楢 兵 庫 頭
毛 宮 内 少

堅 田 安 房 守 左

同日堅田安房就政江戸ヨリ歸國ノ途ニ就ク

堅田安房廣慶家系ニ承應元年三月組頭役被差替御國當職國司備後就正爲代於江
戸被仰渡之

同日木梨吉左衛門就時有故知行沒收ヲ命セラレシニ先代登岐守元次新ニ被徵出

タルヲ以テ知行貳百四十石舊ノ如ク返シ下サル牧野登岐末近九左衛門幸庵隱居分
知行扶持方奉役免除ニ因リ沒收セラル繁澤二郎兵衛就充川上ノ預リ屋敷地高四石
七斗九升ヲ賜フ繁澤宮内利光家譜ニ綱廣公御誕生ヨリ御隱居迄凡四拾四五年勤役
兩度ノ加増石千五百石下地ニ直シ本知行合二千石ヲ領セシム云
七日東漸院内十乗坊ヲ呼ヒ上野御宿坊番衆扶持方五人分小判五兩切錢ニシテ給シ
扶持方ハ本月朔日ヨリ切錢ハ年末ニ贈ルヘキヲ達ス

九日將軍家へ扇二拾本潮煮貝一箱ヲ献セラル扇ハ本年初テ献セラレ以後例ト爲セ
リ
十日櫻井市允元實先代以來多年勤務ノ苦勞ニ對シ知行四拾石加賜シ勤役舊ノ如ク
忘リ無ラシム

十二日長門へ派遣ノ御目付へ知行物成進呈ズヘキヲ聞老ニ伺フ聞老曰此件ハ幕府
ヨリ指示ノ限ニアラズ諸國ノ例ヲ聞キ議定スヘシト列侯へ問合ノ後知行物成員數
國內惣物成五ツ成ニ相定ム依テ其中半分ヲ贈ルヘキニ決ス

同日吉川美濃内二宮三左衛門者山井正雪ノ擧ニ關シ之ヲ我藩邸ニ護因セシム本年

大猷公法會ヲ修セラル、ニ因リ赦免歸國ヲ許スノ傳達アリ
十五日山王社祭我藩依例弓矢二十張旗五本槍二十本鞍馬二匹ヲ出シ祭儀ヲ助ク弓
ハ本年ヨリ廢止セリ

十九日萩城繪圖幕府指示ノ如ク調成シ之ヲ井上筑後守ニ提出ス

二十九日御目付齋藤左源太山田清太夫萩出發歸府ノ途ニ即ク

日不詳夏小知行持無給從來御役目差引方今道觸流シノ處御藏元兩人役支配ニ改正
セラル

七月七日公登城將軍へ謁見

十二日將軍使者ヲ以テ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ公登城拜謝將軍代替初テノ賜鷹タルニ因
リ閨老各家へモ至リ謝ス

十三日長門六連島へ外國商船漂着ス二十七日之ヲ閨老へ達ス同島ハ毛利和泉守領
地ナルヲ以テ和泉守ヨリ上告ス幕府ヨリ奉書アリ之ヲ長崎ニ送致セシム

同日毛利右近昨年七月十三日老臣ニ加ヘラル同年六月老臣ヨリ提出ノ連判誓紙ニ

血判ス

十七日先是我藩民三輪勘右衛門吉利支丹宗教ニ齟齬ノ聞アリ下關ノ權左衛門者告
訴セリ本年五月十六日閨老ヨリふつきの奉書并訴人白狀ノ寫ヲ添へ傳達アリ即之
ヲ國元へ報告ス三輪勘右衛門及同類ヲ國許ニ於テ審問シタル旨趣書案山縣九郎右
衛門ヲ以テ申報アリ之ヲ井上筑後守ニ進達ス筑後守曰三輪勘右衛門訴人權左衛門
ト對決實否判明上申セヨト於是山縣九郎右衛門ニ命シ歸國セシム

十九日將軍龍昌大夫人へ使者ヲ以テ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ公登城拜謝

二十日國許當職堅田安房就政國司備後就正ト交替ス就正在役二年ナリ

二十八日老臣堅田安房國司備後益田越中毛利右京毛利宮内ヨリ貴理師且船究ニツ
キ奉文ヲ以テ船究衆代官衆へ報告ス其文左ノ如シ

慶安五年堅房州從江戶被取下候御代官中船究衆へ被仰渡付立物無盡集十五

逐て得御意候去ル二十六日に於井上筑後守及諸國一同に被仰渡候

一今度筑前にて御とらへ被成候伴天連白狀仕候は大明之内りあんと申所より伴

天連四五人中合到對馬之國渡海可有之通手筈に候依風波何之國え可參段も不知儀候條諸國津々浦々彌以無油斷守其所穿鑿肝要之由被思召之通被仰渡候左候て渡海之伴天連とらへ候におゐては褒美之儀は如御定之被遣其上其伴天連乘來候船之家財不殘其所え可被下之由に御座候尤其所え來候伴天連其所にて取ぬかし他國にてとらへ候へは大き成緩せに可罷成段内々御沙汰之前御座候然時は可成程津々浦々に被付置者とも無油斷様に被仰渡儀肝要存候

一かりうだ船先年渡海之刻彼乘船之貴理師且共數多於長崎御成敗被仰付候然といへとも兎角日本え無渡海候ては不相成に付て今一通令渡海御佗言可申上之由かりうだとも内々催仕之由候御佗言に付て渡海仕船之儀候條定て長崎すちえ心懸可參候へ共風波に被放候は、何之國え可來段も不知儀候條無油斷守海上候様にと被仰出候さ候て右之かりうた船沖を乘通り候は、黒船之儀は無紛大船之儀候條見懸次第にいつれの國筋え乘通り候通從其所於江戸可被途言上候通候事

一内々被仰渡候は右之黒船海上遙に懸り乗泊り罷在候は、見懸次第其所より船を出し可成程懸ヶ留候やうに手遣候へと被仰出候へ共其儀には及ましき之由此度之被仰出に御座候其故は右之黒船は城之如クかこひ夥敷大船に人數多乘石火矢なと澤山に候てはたらき非大形候條日本之小船何ほと寄せ候ても懸留候儀中、不相成儀候然時は惡敷働を致し剩懸留儀不相成時は日本之御外聞尖申儀候條海上遙にかゝり船見付候共日本之船一切出間敷之由候左候て何程陸より沖に黒船懸り居申段公儀え可有注進候其跡にて右之黒船何國え參候ても注進無首尾に罷成間敷由候勿論參候方角大形見届何之國筋へ參候通重て御注進可申上之由候事

一右之黒船日本え之御佗言に參候は兎角陸え上り可申心指可有之候條いつれ之國え着岸仕候共湊入可申候左候は、其所之者共如何様にも才覺いたし貴理師且共を陸え呼上ヶ候てとらへ可申候尤湊え入候船の儀に候は、可成ほど才覺を以船をも懸留候様に可仕候陸え船に乗候者ともを呼上ヶ候段は種々才覺可

有之所に候其仕様は只今一筋之指圖難相成儀に候其時之様子次第其所之者共之才覺有之儀候條如何様にも手遣候て呼上ケ可申候今度奥州筋南部之浦に異國船來候山城守内之者共能才覺を以右之異國人數多陸えよひ上ケとらへ候て差上ケ申候か様之儀も其所之者とも之能才覺故に候條如何様にも相計候へ之由被仰渡候事右之被仰出只今遮て其元え被仰出候儀は右之かりうだ船海上遙に沖繫候とも只今よりは日本之小船差出懸留候手遣無用に仕候へ之由被仰渡候段此中之様子に少易り候へは此段肝要に候心得入申事と被思召に付て被仰遣候間可有其御心得候若湊え船乗入候は成程才覺を以被繫留乗舟之者陸え呼上御捕候得は一廉之御馳走に相成儀候此段内々以無油斷儀に候得は今更被仰聞不迷候へ共彌無油斷津々浦々被仰渡儀肝要に候右之趣從公儀節々被仰渡所も諸國無油斷様にとの儀に候得は尤度々御分國中御沙汰有之所肝要候恐惶謹言

卯月二十八日

主殿助
福間彦右衛門

梨頼母

兒 淡 路 棧
益 越 中 棧
右 京 進 棧
志 摩 守 棧

右之分に從江戸被仰下候條御奉書寫進之候被守此旨可被相究候給領之船手浦に候は、此段方角之御代官衆より可被申渡候爲其一紙に申入候以上

寛永二十一年
五月十五日

兒 淡 路
益 越 中
右 京 進
志 摩 守

箇條

一 貴理師且船究之儀に付て先年從江戸壹つ書を以被仰下候趣寫申付相渡候條右

之辻能々承知被仕御番所無緩可有御所勤候事

一自然あやしき船被見付候は、夜白を不限繼飛脚を以可有御注進候事

付右之時被乗出候船之儀内々手堅申付候條旁も手筈取置候儀尤に候事

付御用に付て萩え被申越儀候は、是又繼飛脚にて可被差越候宿々えも此段

申付置候事

一山之辻物見之番所手子之者無油斷様に可被申付事

一旁御番所より存之浦々え無心元船并不審成者參候は、夜白を不限旁々え注進

申候様内々被申付置手堅可被相究事

付夜中自然之時之爲候條續松地下之者え申付可被置候事

一天下御物送等之儀夜白不限無緩様に可被申付候此段は此中被付居候衆様子可

被存候條被相尋彌無油斷様に内々所之者えも手堅可被申付置候事

一下目え之御上使御通り之時自然旁存之浦々湖懸り被成候は、早速被罷出御用

等も候は、被仰付候様にと御同衆迄被申上可被遂御馳走候此段も此中之付置

候乗え様子被相尋承届彌無緩様に可被遂其節候事

一御國中之船之儀は不及申他國船たりといふとも風波之時旁存之浦え寄船有之

時者所之者船を出し随分相抱候やうに才覺可被申付候若破損仕候は、可成程

人を助ヶ荷物等取上ヶ候様に手遣無緩可被申付候事

付船破損仕乗衆不殘相果候は、取上ヶ候荷物則其濱にて相究所之庄や年寄

に念を入付立被申付旁御所務代衆連判に奥書被仕荷物所之者に番等被申

付置早速爰元え注進可被申候事

付破損船に生殘候乗衆有之は取あけ候荷物念を入被相究書付所之庄屋浦老

ニ判形被申付其奥書を旁と御所務代衆連判可被仕候右之乗衆奉公人なら

ば當り所其仁え可被相尋候百姓は其所之代官町人は町奉行え送狀被相調

置其趣急度爰元注進可被申候事

付自然寄荷有之時取隠し候者已來聞届候は、法度可申付候見出候は、早々

庄屋老へ可遂注進候其上庄屋老相究寄物付立に庄屋老奥書并旁御所務代

衆おく書被仕寄荷庄屋え預置其趣注進可被申候事

付海上にて荷物勿候て浦え船を着荷物はね候證據之墨付其浦より取罷通之由候右之究之儀ははね荷海上にて之儀候條難極可有之候條船中之殘荷旁御所務代衆被相談可被相究候自然代官衆旁も不被居合候は、所々庄屋老念を入船中之有物計相究付立を以御代官衆旁へ遂注進候得と内々被申付置候て右之注進有之はおく書可被仕候事

付文牒は沖にてはね荷證據不存候へとも何那何浦にて船中相究候得は有物無紛候付て如此にと書付可被申候事

付爲破損船北國目之御大名衆より津々浦々に船究之仁被付置之由候條北國船破損仕候は、早速それく被付置候船究衆え被申届其仁申次第究被申付早速爰元え注進可被仕候其國より船究之衆被付置候分は此方より之送状墨付調遣に及間敷候

付破損船之荷物情を入取上ケ候付て所之者え船頭より禮物仕候共一圓請引

仕間敷候事自然隠候て請引候もの有之は一廉曲事可申付候事

一他國米他國酒御國中にて買候事御法度候條地下之者え手堅可被申渡候自然かくし候て水上など仕候者有之は曲事可申付候條此段可被入御念候事

一他國船旁存之浦え着候て陸へ上り候は、其國之家老或は町奉行代官などより勘過之手形持參候は無異儀出入可被申付候手形無之船は一切上ケ被申間敷候事

付商人船にて其先きく問屋之手形持參候て所之庄屋老無紛段存候は其段相究陸え上ケ可被申候是又理り右同前候事

付通船にて沖に懸り居水取などに上り早速本船え乗候分は手堅究に及間布事

一貴利師且究之儀彌無油斷可被相究候旅人宗門究之儀は船陸共に旁存の浦え來逗留もの有之時は貴利支且宗にては無之哉之通念を入被相究其上何の國何村之者何宗にて且那寺は何と申之通手堅書物可被申付置候事

付陸を通り候旅人先々より勘過候手形有之右之究於無紛は一宿は貸可申候
 二夜と逗留候は彌被相究難極子細有之は指留置早速爰元え可有注進事
 付破損船并はね荷有之時右之分に證文此方より仕候て遣候時は其墨付のこ
 とく荷物に負數何くと委敷書付此方より之證文之辻罷戻候上にて御家
 老中え可申達候通念を入船頭へ墨付被申付無紛通候方おく書被仕早速爰
 元え注進可被申候左候は、爰元より其先々之御國え右之證文差遣儀候條
 可被得其意候事
 一旁存之浦人より禮儀禮物一切請引被仕間敷候其外所之者造佐に成被申間敷事
 以上
 右先年自江戸被仰下候御奉書之寫并今度ヶ條を以申渡候辻念を入被相究可被遂
 其節候給領之船手浦々へは方角御代官衆より此段手堅可被申渡候爲其一紙に申
 入候以上

慶五ノ

七月二十八日

堅	國	益	毛	毛
安	備	越	右	宮
房	後	中	京	内

以下略

二十九日御目付齋藤左源太山田清太夫歸府
 八月朔日公登城將軍へ謁見太刀目録ヲ獻セラル
 二日千代姫君尾張大納言 光友室 分娩男子生誕公登城之ヲ賀ス尾張邸へモ至リ賀ス
 同日公齋藤左源太山田清太夫ヲ訪フ
 同日長門大津郡向津具浦へ泉州安海ノ商船一隻流着十八日之ヲ幕府ニ上告ス此船
 ハ漂流ノトキ毛利和泉守領地鳴戸角島ノ住民發見セシ故和泉守ヨリ長崎へ送致ス
 へキノ報告アルヲ以テ又之ヲ聞老ニ報ス
 九日本日ヨリ明曆三年迄六ヶ年堅田安房當職在勤中所務代ヨリ勤務方ニツキ伺書

へ對シ安房肩書指令及安房肩書ニ板本遠江奥書指令アリ略大紀錄十三
二十八日渡邊五郎右衛門充同名太郎左衛門元實子ナク末期ニ及ヒ養子請願スト雖
トモ法規アリ許可ノ限ニ非ス然レトモ渡邊ノ家筋ニ對シ名字繼續セシメント大照
公ノ恩意モアレハ知行六百石加賜セラルヘキヲ兒玉元恒梧杜就幸ヲシテ命ヲ傳ヘ
ムシ根知行四百石
引合千石

九月三日三井善兵衛ニ隱居ヲ允シ實子七郎兵衛ニ勤役スヘキヲ命ス木村九郎左衛
門給米八人扶持米四十石并毎月金十兩賜リタルニ本年五月ヨリ十八扶持年末ノ切
米五十石下付セラレ月別金ハ賜ラストナリ

五日依例將軍家へ重陽ノ吳服ヲ獻セラル

同日千代姫君ヨリ龍昌大夫人へ重陽ヲ祝シ椀肴ヲ贈ラル

六日今日ヨリ増上寺法會アリ公佛殿へ參拜十日モ亦同シ宗源院二十七
同忌也

九日公登城將軍へ謁見

十四日増上寺宗源院秀忠公法會へ公ヨリ香奠銀二十枚龍昌大夫人ヨリ銀五枚ヲ納

メラル

二十五日將軍重陽ノ内書ヲ下附セラル如例

二十七日毛利右京初テ關老各家ヲ訪ヒ太刀馬代ヲ呈ス

二十八日江戸作事方飯田七兵衛過失アリ脱走ス親彦右衛門七兵衛住所不明故幽囚
セラレシニ青松寺ノ辯護ニ依リ放免セラル

二十九日毛利右京關老松平和泉守邸ニ至リ連判ノ摺紙ニ血判ス

同日關老松平和泉守福間彦右衛門ヲ召シ長門へ御目付石川彌左衛門石丸石見守ヲ
派遣セラルヘキノ台命ヲ傳フ公登城拜謝關老各家へモ至リ謝ス此日慶安ノ年號十

八日ヨリ承應ニ改元ノ發表アリ

十月二日公石川彌左衛門石丸石見守ヲ訪フ御目付派遣ヲ祝シ太刀馬代并小袖五ツ
ヲ贈ラル

六日石川彌左衛門石丸石見守ヨリ請求ニヨリ防長兩國道程并隣國へノ海陸道法書
立ヲ示ス

十四日貴利支且宗教ニ嫌疑アル三輪勘右衛門訴人權左衛門國許ニ於テ對決之趣粟屋半左衛門桂權左衛門ヲ以テ報告アリ即チ此レニ關スル書案數通ヲ添ヘ之ヲ井上筑後守へ上告ス其意此餘我藩ニ於テ審判スルモ要領ヲ得サルヘシ願クハ原被兩人江戸へ召出サレ裁決アルヘシト云ニアリ

無盡集三貴利師且宗門之儀付テ三輪勘右衛門訴人下之關の權左衛門慶安五年九月三日ニ萩へ被召出同五日ヨリ於新宅對決被仰付候一卷并御老中御尋之様子粟屋半左衛門桂權左衛門江戸へ持參被申候兩人自分之覺書寫ヲ載ス參觀スヘシ二十五日給領所務代御心付米ハ諸臣公借アルモノ、出米ヲ以テ支給スヘキニツキ其割符方及其方面所務代へ公納スヘキヲ一門以下出米主ニ對スル奉文七通アリ略

大肥錄卷十三

二十七日將軍ヨリ鷹捉ノ雁ニヲ賜ハル公登城拜謝

十一月一日兩國內へ郡奉行派遣ノトキ當役ヨリ條書ヲ授ク左ノ如シ

覺

一天下御法度連々從公儀被仰出候御簡條之旨彌無違背可遂其節之通堅可被申渡事

一天下送并御用付て在々繼送傳馬等無滯様ニ可被申渡事

一貴利支且宗穿鑿之儀愈無緩様ニ可被申渡候自然不審成もの於有之は可申出之候一廉可被加御褒美事

一道橋年々取繕仕人馬之往來無其煩様に可被申渡事

付塘井手川除念を入修補候様に可被申渡事

一度々雖被仰渡候彌下々百姓等に至迄重公儀勤其役事肝要に候條抽公役勤自業もの有之は如何躰之不肖たりとも代官兼可被申出候應其品御褒美可被遣事

一對公儀諸事企惡調儀發起之族あらは可訟之縱同類たり共其科を許し可被與御褒美候依品立身をも可被仰付事

一庄屋畔頭手前に非道之儀於有之は代官兼迄可申出有躰に沙汰候て可遣之若代官兼取繼於無之は御兩所迄可訴之旨能々可被申聞事

一如何跡之所有之とも數人一味之訴訟甚以不謂儀に候條此段手堅可被申渡事
一諸勸進いよ／＼堅停止に可被申付事

一御所務之儀御先代に不相易春定に被仰付有體之沙汰に申付候間其段可被申渡候事

一御藏入中算用來年よりは七月晦日を切に可被相調之旨代官衆之儀は不及申諸庄屋迄えも可被申渡事

一去物成拂切之地下延算用代官衆被相究算用狀に印判突被置候哉可被相尋事
付地下百姓つなき物其外品々之入目從庄屋之付出に代官衆印判衝被置候哉

是又可被相究事
一井手川除何も地下役所勤之者え公儀より飯米被遣候分庄屋より小百姓銘々え

勘渡候哉可被相尋候勿論庄屋え百姓中よりの請取狀究可被申事
以上

右付書共に十五ヶ條之辻能々可被申開候以上

承應元年

十一月一日

堅 安 房
國 備 後
益 越 中
毛 宮 内

羽仁彦右衛門
天野九郎左衛門

四日太田備中守宮城越前守兼松下總守八木勘十郎宮城三左衛門櫻井宗恩片桐石見
守福阿彌ヲ櫻田邸ニ招キ之ヲ饗セラル神尾備前守モ大城ヨリ歸路來邸備中守ノ首
途ヲ祝シ謠曲ヲ奏セシム

九日將軍ニ國內所獲ノ鶴ヲ獻セラル

同日湯原太郎左衛門元嘉ニ隱居ヲ允シ其子又兵衛就忠ヲシテ元嘉ノ後ヲ繼キ采地
ヲ領セシム福原八郎左衛門元直因病隱居ヲ請フ公之ヲ允シ其子長右衛門就方ニ跡
職ヲ命シ奉役怠無ラシム三戸四兵衛ニ隱居ヲ允シ其子宇兵衛ニ家督ヲ命ス三戸四兵衛基

芳及三月平吉次久家系
ト年月符合セヌ後考

張半左衛門就久病ニ依リ隠居采地ヲ其子喜之助ニ讓與セント請フ公之ヲ允シ公役
怠無ラシム

同日幕府浮浪人之制禁ニ關シ大坂町奉行ヲシテ諸藩倉邸へ令條ヲ發セシメ及ヒ諸
家ヨリ請書左ノ如シ

大坂御町奉行衆より諸家藏屋敷留守居中へ被仰出之御ケ條并御請狀

一大名衆大坂藏屋敷之事町屋敷ニ候付て牢人御法度之儀毎度町直ニ相觸候間牢
人抱置被中間敷事

一國元より煩爲養生又は用事有之候て被罷上候面々其所々藏本より當座之手形
を取宿借可申之旨町中へ相觸候今以可被得其意候事

一諸大名衆合力を請有之牢人之事當分大坂に致逗留落着其所へ參候牢人は藏本
より之手形にて宿貸可申之由子ノ九月町中へ相觸候左様之もの於有之は此方
へ被相斷其牢人之様子を番所之帳に付置可被申事

一大名衆へ日來致出入牢人之間合力を請身體落着其身之心次第之者を藏本より
手形出し其家中之扶持人にいたし被置候は、其藏本之仁可爲越度候并宿主勿
論可爲曲事由子ノ九月書出候彌相違有間敷事

一自今以後は藏元面々縦親類縁者たりと云とも被抱置候は、此方番所え帳可被
付置候無用と申にては無之候間無理抱置被申於相知候は主人へ急度可申理事
右之條々不可有違背者也

承應元

霜月九日

隼 人 正
丹 波 守

按寛明日記隼人正ハ松平隼人丹波守ハ岡部丹波守ナルヘシ

諸大名衆大坂藏屋敷留守居中右之通承知仕候難退牢人於抱置は御番所へ御理申
其牢人之名名字御帳に付可申候若隱置被聞召候は主人御斷可被成之由奉得其意

候爲後日判形仕候私ども替り罷下候は、替り之者に御紙面趣儘に可申渡候以上

辰ノ

十一月九日

十六日御國目付石川彌左衛門石丸石見守ヲ櫻田邸ニ招キ之ヲ饗セラル近日國元へ
出發スルヲ以テナリ

二十九日證人奉行福間彦右衛門ヲ召シ先ニ申請アリシ如ク毛利紀伊守證人娘くま
ヲ弟吉十郎ニ交替セラルヘク因テ來春吉十郎出府セシムシト傳命アリ

十二月二日寶樹院家光公側室實朝倉氏女卒去三日列侯ト同ク登城拜弔増山彈正へ
使者ヲ以テ弔問セラル

四日將軍隙氣之内公登城候間セラル五日モ亦同シ

六日佐々部又右衛門跡職其子長介ニ命ス久芳長兵衛元時跡職其子才八郎某ニ命ス
久芳五郎右衛門兼城家系五郎右衛門忠次條下弟才八香川太郎兵衛就之跡職其子半
耶某綱廣公御代兄忠次分地シ別建一家天死故家斷絶助就正ニ命ス有倉勘左衛門賴貞其子内記某賴貞死去未タ家督ノ許命ヲ得ス内記亦

死ス死後弟式部賴太ヲ養子ト爲サント請フ然レトモ法規アリ八十石ノ内三十石減
セラレ五十石ヲ式部ニ賜フ

同日御旗九郎兵衛政故御中間頭勤務中幕府囚人朝倉清左衛門ヲ御中間河野與三左
衛門外四名護衛ス政故當直ノ夜清左衛門脱半セリ因テ審問ノ末警固ノ御中間ハ皆
誅戮セラル政故ハ先ニ拘禁セラレシカ監督ノ任ニ當リ其罪宥サレカタクトテ知行
三十石沒收セラル

十一日來年ハ大猷公三回忌ニ當ル列侯國許ニ於テ法會修セラルヲ以テ公モ氷上山
ニテ佛事執行アルヘキニ天台ノ僧侶不足ニツキ叡山ヨリ十二三人ヲ呼下シ京都聖
智院へ法會ノ都合協議スヘキニ決シ上野東漸院ニ依頼セラル

十三日江戸京都大阪長崎ニテ秀就公御代借金利子一割以上ナリ然ルヲ本年八月三
井善兵衛藤井長右衛門ヲ使トシ利子納入方ヲ債主ニ請求ス其旨趣ハ一ヶ年ノ利納
四歩ニシテ元金百貫目ニツキ十貫目宛年々償還スレハ十貫目之内四貫目ハ四歩ノ
利分ニ當ル六貫目ハ元之内ナリ如此返濟シテ毎年元金減少スル處ハ計算之前ヲ以

テ調済スヘシト云ニアリテ債主モ略之ニ應セリ

秘府明和抄書四松平千代熊爲用所借用申銀子事

合二百五十貫目丁銀

右ハ先年松平長門守代之時爲用所被申請候銀子直様借用被申所實正也調之儀

ハ百貫目ニ付一ケ年ニ十貫目宛相調可申候此内四貫目ハ一ケ年之利足也六貫

目ハ元銀之内へ且納也一ケ年切ニ元銀ヘリ候所其辻勘定前以差引其沙汰可申

付候百貫目ニ付十貫目宛調之儀元銀不殘相濟候迄ハ毎年堅固調渡可申所如件

承應元年極月十三日

兒玉淡路守印

相杜兵庫頭印

堅田安房守印

末次平藏及

以下略

十八日將軍へ歳暮ノ吳服ヲ獻セラル如例

本年末諸規式十三日節酒獻上ノモノ謁見二十五日煤掃ノ式二十七日節分御祝等例

ノ如ク執行セラレタルモ定例恒格ノ舊章ニ由ルモノハ録セス

246
42
231

不許
複製

明治四十年十月十一日印刷
明治四十年十月十五日發行

公爵毛利家藏版

(非賣品)

編輯者兼

大田報助

東京市芝區白金猿町六十一番地

印刷者

村田峰次郎

東京市四谷區元綾河橋南町八十八番地

印刷所

會社 成社

東京市京橋區本八丁堀一丁目九番地

毛利十一代史

同	同	同	三	同	同	同	二	同	同	一
二六ウ	一八ウ	七ウ	二六オ	二二オ	二二オ	二一ウ	一八ウ	三八ウ	三二ウ	二一オ
七五	七六	七六	七七	七七	一〇	四	二	四	六	六
紙ノ上ニニ字脱ス	雄	サ	之	止	き	被	不	か	へ	せ
令	語									
以	請	此	雉	貝	止	や	不	う	人	を
		付			之		被			

毛利十一代史第一冊正誤

枚數ノ項中「オ」ハ表「ウ」ハ裏ノ略符ナリ

卷

枚

行

誤

正

